「天に上げられる」　　2023年12月15日

それからイエスは、彼らをベタニアまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに戻り、絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。（ルカ24：50～53）

復活した主イエスは、弟子たちに十字架と復活の出来事は、悔い改めて信じる者には罪の赦しの福音であると語られた。この福音はエルサレムから始まり、全世界に宣べ伝えられる。復活した私を見たあなたがたは、このことの証人である。あなたがたは福音宣教の使命があると告げられた。神が約束された聖霊が送られる。聖霊の力を身に着けるまで、エルサレム留まり、聖霊降臨日を待ちなさいと命じられた。

それから、主イエスは弟子たちをベタニアまで連れて行かれた。ベタニアは、主イエスが愛したマルタ、マリア、ラザロの三姉弟が住んでいる村で、受難週の日々は、ベタニアに戻り、ここから毎日、エルサレムに上って行った。弟子たちにとっても、通い慣れた村であった。主イエスは弟子たちをベタニアまで同行させ、そこで、手を上げて祝福された。旧約聖書の外典に『ベン・シラの知恵』という文書がある。その50章20節に「彼（大祭司シモン）は降りてきてイスラエルの子らの全会衆の上に手を挙げ、その唇で主の祝福を与え、彼の名をたたえた」とある。手を上げての祝福は「祭司的祝福」を意味する。主イエスは祝福を与えて、弟子たちから離れ、天に上げられた。このシーンはエリヤの昇天シーンを想起する。「彼ら（エリヤとエリシャ）が話しながら歩き続けていると、火の戦車と火の馬が二人の間を隔て、エリヤはつむじ風の中を天に上って行った。（列王下2：11）」主イエスは、神によって天に上げられた。聖書でいう「天」は空ではなく、人間の世界を超えた神の領域を表す言葉である。人間には届かない天に帰られたということである。

主イエスが天に帰られた姿を見た時、弟子たちは伏し拝んだ。ルカ福音書において、弟子たちが主イエスを伏し拝んだのは、この時が初めてである。復活して、昇天する主イエスを神として心から崇めたのである。弟子たちは大喜びで、エルサレムに戻った。

エマオに向かう二人の弟子は「暗い顔をして立ち止った（ルカ24：17b）。」主イエスをローマからの解放者と信じていた彼らは、十字架で殺され、望みが絶たれた。また、女の弟子たちから、主イエスは復活して生きておられると聞いても、とても信じられず、暗い顔になってしまった。そして、復活した主イエスが現れ、十字架で釘付けにされた手と足を見た時、「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議に思っている（ルカ24：41）」と、喜んではいるが、疑いもあった。心の底からの喜びではなかった。しかし、天に帰られた主イエスを仰いだ時は、無条件の大きな喜びで満たされた。この喜びは、主イエスのご降誕を天使が「恐れるな。私は、すべての民に与えられる大きな喜びを告げる（ルカ2：10）」と知らせた時と同じく、神からの救いが実現する大きな喜びであった。

弟子たちは、エルサレムに戻り、神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。神が与えてくださる聖霊の降ることを信じ、信仰に燃え、待っていたのである。

著者ルカは、主イエスの降誕から、昇天までの出来事を記し、主イエスにより、人間の罪の赦しが与えられるという喜ばしい便りを伝えてきた。そして、聖霊を受けて、弟子たちが福音宣教に向かう使徒言行録へと繋げている。主イエスの福音が現実化し、歴史の中で継承されていく壮大な救済史を描くことが、著者ルカの使命であった。